

令和 4 年 5 月 11 日現在

機関番号：34420

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2021

課題番号：19K02849

研究課題名（和文）性の多様性を包摂する小学校国語科教育カリキュラムの開発

研究課題名（英文）Development of an elementary school Japanese language education curriculum embracing gender and sexual diversity

研究代表者

原田 麻詠（永田麻詠）（NAGATA, Mayo）

四天王寺大学・教育学部・准教授

研究者番号：10612228

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：性的マイノリティとされる子どもの一人称の問題や、性的マジョリティとされる子どもの言語感覚の問題など、性の多様性をめぐるインクルーシブ教育を実現するためには、ことばに関する課題があることを確認し、小学校国語科教育において、性の多様性とことばの課題をどのように取り上げるべきかを明らかにした。

また、質的な語彙指導や言語感覚の育成、文学教育やメディアリテラシーの授業化を通して、性の多様性とことばの問題に対し、発達段階や学習指導要領をふまえたアプローチを考案した。そのうえで、性の多様性を包摂する小学校国語科教育カリキュラムを検討・開発した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

教科教育領域において、性の多様性について取り上げることは少なく、とりわけ国語科教育において、性の多様性をめぐる授業や単元学習の提案は非常に少ない現状がある。本研究の成果によって、国語科教育として性の多様性についてどのように取り上げ、教科学習として、性の多様性をめぐる問題をどのようにとらえなおすことができるのかを明らかにできたことは、学術的意義がある。

さらには小学校国語科教育カリキュラムとして、学習指導要領や発達段階をふまえた単元の目標や評価基準、教材開発など、実践可能な提案を行った点に社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：The study confirmed that language-related issues need to be addressed to achieve inclusive education on gender and sexual diversity. These issues include the use of first-person pronouns for children who are considered to be LGBTQ and the sense of language among such children. The study then clarified how gender and sexual diversity and language issues should be addressed in elementary school language education.

An approach was then designed based on the children's developmental stage and course of study to address issues relating to gender and sexual diversity and language. This approach involved qualitative vocabulary instructions and the development of children's sense of language as well as the creation of lessons on media literacy and literary education. Accordingly, an elementary school language education curriculum that embraces gender and sexual diversity was studied and developed.

研究分野：国語教育学

キーワード：性の多様性 ジェンダー 国語科教育 言語感覚 語彙指導 社会的特権 人権教育 当事者性

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初の背景としては、近年、13人に1人が性的マイノリティであると言われており、性の多様性に大きな注目が払われていること、性の多様性への対応が、教育現場でも喫緊の課題であることが挙げられる。研究開始当初は、2010年に文部科学省が発表した「児童生徒が抱える問題に対する教育相談の徹底について（通知）」や、2014年の「学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査について」という調査報告、2015年の「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細やかな対応の実施等について」から、2016年の「性同一性障害や性的指向・性自認に係る、児童生徒に対するきめ細やかな対応の実施等について（教職員向け）」に至るまで、性別違和のある児童生徒をはじめ、多様な性的指向や性自認のある児童生徒への対応を文部科学省が求める一連の動向があった。

なお、文科省による2014年の調査報告「学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査について」では、「特別な配慮の事例」の一つに「全ての生徒を「さん」付で呼称するよう統一する」ことが示されている。ほかにも、中塚（2017）のMale to Female当事者への調査では「言葉遣いと精神状態」という質問項目があったり、いのちリスペクト。ホワイトトリボン・キャンペーンの調査では、性的マイノリティとされる回答者の68%が、「身体的暴力」「言葉による暴力」「性的な暴力」「無視・仲間はずれ」のいずれかを経験したことがあり、「言葉による暴力」が53%でもっとも高いという報告があったりするなど、研究開始当初の現状からは、性の多様性への対応にことばの側面は欠かせないことが確認できた。

このように、「言葉による暴力」を含む言語感覚など、ことばの側面が重要な意味をもつ以上、国語科教育が取り組むべき課題の重要度は高いが、研究開始当初の教育現場では、人権教育や道徳教育、生徒指導、保健体育科や家庭科などで性の多様性を取り上げることが多く、国語科教育において性の多様性をめぐる取り組みがほぼなされていなかった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、性の多様性をめぐる課題にことばの問題があることを確認し、小学校における性の多様性の包摂を国語科教育として取り組むこと、性の多様性の包摂をめざすことが、性的マイノリティ支援ならびにすべての学習者への言語力育成につながることから、新たな小学校国語科教育カリキュラムをインクルーシブ教育の一環として開発することである。

特に、以下の3点を研究の目的として、考察や検討を進めてきた。

(1) 性の多様性を包摂する教育実践を小学校国語科教育として取り上げ、「言葉による見方・働き方」の深化拡充や、言語力の育成をめざすカリキュラムを開発する。これまで、人権教育などで取り組まれてきた性の多様性をめぐる教育実践を、ことばの側面に着目して教科教育としてカリキュラム開発を行う。すなわち、性の多様性の包摂を性的マイノリティ支援だけでなく、すべての学習者への言語力育成をねらいとする。

(2) 性の多様性を包摂する国語科教育をインクルーシブ教育の一環として位置づける。性の多様性を包摂する小学校国語科教育カリキュラムをインクルーシブ教育として開発し、通常の学校に携わる教員の資質・能力向上に貢献する。

(3) 研究の成果を教育現場で試行し、フィードバックすることで実践可能なカリキュラム開発を行う。研究の成果を実際の教育現場で試行することにより、カリキュラム開発の成果と課題を検討・評価する。

3. 研究の方法

(1) 学習指導要領や、諸外国における性の多様性への対応に関する先行研究をもとに、小学校国語科教育カリキュラム開発の契機を得る。「言葉によるもの見方・考え方」や「伝え合う力」、言語感覚など、新学習指導要領国語編の目標や内容と性の多様性をめぐる課題を関連させ、性の多様性を包摂する小学校国語科教育カリキュラムを具体化する。その際には、諸外国におけるクィア・ペダゴジーやUNESCOほかを示す「包括的性教育」を精査し、クィア・ペダゴジーで見られる批判的リテラシーや「読むこと」の学習、「包括的教育」における「価値観・態度・スキル」の学習などに着目しながら、学童期という発達段階を考慮して知見を整理する。

(2) 性の多様性を包摂する小学校国語科教育カリキュラムが、性的マイノリティとされる子どもにとって、どのような具体的支援として機能するか、研究協力校における授業提案および参与観察により、実証する。性の多様性への対応におけることばの側面を整理し、性的マイノリティとされる子どもには、人間関係に伴うことばの問題がどのように認められるのか、質問紙調査などで明らかにする。そして、性の多様性を包摂する小学校国語科教育カリキュラムが、性的マイノリティとされる子どもの人間関係や、ことばの問題をいかに解消するか、授業提案と参与観察を

通して実証する。

(3) 性の多様性を包摂する小学校国語科教育について、インクルーシブ教育の観点からカリキュラムとして再検討する。(1) や (2) で得られた知見や結果を、日本だけでなく国際的な立場からとらえたインクルーシブ教育と関連させ、通常の学級で取り込まれるべきインクルーシブ教育の一つとして、性の多様性を包摂する小学校国語科教育カリキュラムを整理、再検討する。また、インクルーシブ教育としての性の多様性を包摂する小学校国語科教育を、教員用研修マニュアルとして作成する。

(4) 実践可能な小学校国語科教育カリキュラムの構築に向けて、カリキュラムの一部を研究協力校にて試行し、研究成果にフィードバックする。開発したカリキュラムに対しフィードバックを得ながら修正する。さらにカリキュラムの一部を申請者や協力教員が試行し、結果をふまえてより実践可能なカリキュラムに整理する。

4. 研究成果

本研究の成果は、次の点である。

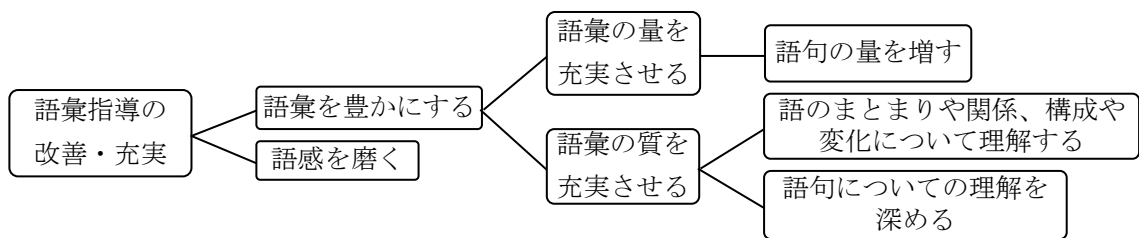
(1) 性の多様性をめぐる問題におけることばの側面を整理し、人権教育などを通して行われてきた性の多様性に関する対応は、国語科教育として取り組むべき課題であることを明らかにした。特に、学校教育における性の多様性への対応として、教科による取り組みの意義と課題を確認しつつ、言葉による見方・考え方を働かせる教科である国語科が、性の多様性をめぐる学びの場として、どのような可能性があるのかを指摘した。また、そのなかで文学教材の有用性や、自分の経験と結ぶ学習活動に言及しながら、国語科教育として、児童生徒に当事者性を立ち上げることの重要性について明らかにすることができた。

(2) ことばの側面を中心とした、性の多様性をめぐる課題を国語科教育においていかに取り上げるべきか、基礎的理論にクィア・ペダゴジーを据えて、国語科教育における批判的リテラシーの育成の観点から具体化した。その際、性の多様性を包摂する国語科教育に向けて、批判的教育学における批判的リテラシーや、クィア・ペダゴジーと「読むこと」の学習を結ぶことで、文部科学省の働きかけが、性別違和のある児童生徒への支援や対応に偏っていること、教育相談および生徒指導や人権教育等に限定的であることという課題をのりこえることとなり、これまでの国語科教育で課題とされていた、批判的リテラシーを学習内容として位置づける可能性を見出すことができた。性の多様性への支援は国語教育も決して無関係ではなく、‘the study of reading practice’を重視するクィア・ペダゴジーから考えれば、国語教育はむしろ性の多様性を包摂する教科指導として重要であることが明らかとなった。

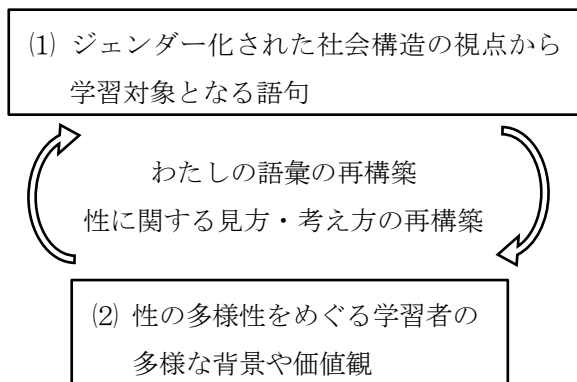
(3) 小学校国語科教育で取り組むことのできる単元学習として、性の多様性をめぐる言語感覚の育成を考案した。特に、社会言語学の知見を参考に言語感覚の育成について検討し、文学的教材を用いた学習をとおして、私たちの「思想」や「ディスコース・コミュニティの慣習」を批判的に検討すること、すなわち、性をめぐることばへの違和感を学習として取り上げることで、性の多様性に対する社会的な価値観を批判的に検討することが、「言葉の暴力」等に対する言語感覚の単元学習となることが明らかになった。さらに、性の多様性をめぐる言語感覚の育成を授業化する際は、すべての子どものエンパワメントをめざすこと、アウティングやカミングアウトの強制を避けるために、文学的教材を用いて実践を構想すること、性をめぐることばに対する具体的な違和感を検出することで、多様な性に対する社会的な価値観を批判的に検討できるような学習展開を具体化することの重要性を整理することができた。

(4) 中学校国語科教育で取り組むことのできる単元学習として、性の多様性をめぐるメディアリテラシーの学習を考案した。とりわけ、『国際セクシュアリティ教育ガイダンス』で示される包括的性教育をてがかりにしながら、各教科における目標や教科内容に鑑みて、性の多様性をめぐる教育実践を検討すれば、教科外の取り組みだけでなく、日常的な教科学習での可能性が広がることを確認した。そのうえで、中学校国語科教育では国語科の教科内容から、「情報の取り扱い方に関する事項」に着目し、メディアリテラシーの授業によって、自身の言語感覚や価値観を省察し、性の多様性に対する当事者性を立ち上げることが可能になることを明確にすることができた。

(5) 小学校および中学校国語科教育で取り組むことのできる単元学習として、性の多様性をめぐる語彙指導について考案した。その際、特に語彙指導の質的側面に着目し、性の多様性に関する語彙指導として、ジェンダー化された社会構造の視点から学習対象となる語句と、性の多様性をめぐる学習者の多様な背景や価値観とを結ぶことで語彙の質を高め、学習者自身による語彙の再構築を通して、ものの見方や考え方の再構築をめざす学習活動を考案した。さらに、小学校学習指導要領解説国語編の内容や、実際の中学校国語科教材を用いて、具体的な授業実践案を考案し、小学校国語科教育カリキュラムの開発をふまえた検証を行った。なお、語彙指導における質的側面は、学習指導要領の目標や内容をふまえると、以下のように整理することができた。



また、ジェンダー化された社会構造の視点から学習対象となる語句と、性の多様性をめぐる学習者の多様な価値観を結ぶことで、語彙の質を高める単元学習については、次のように図示している。



(6) (3)~(5)の単元学習や授業実践の考案をふまえて、性の多様性を包摂する小学校国語科教育カリキュラムを具体化した。

	【知識及び技能】	【思考力、判断力、表現力等】	【学びに向かう力、人間性等】
小学校 低学年	<ul style="list-style-type: none"> 言葉には、性をめぐって経験したことを自己や他者に伝える働きがあることに気づく 性の多様性に関する語彙を豊かにする 性の多様性をめぐるいろいろな本があることに気づく 	<ul style="list-style-type: none"> 性の多様性をめぐることがらに対して、関心や感想をもつ 性の多様性をめぐることがらと自分の体験を結びつけて、感想をもつ 性の多様性をめぐることがらに対して、感じたことやわかったことを共有する 	<ul style="list-style-type: none"> 性をめぐる多様な見方・考え方に基づく言葉がもつよさを感じる 性の多様性に関する言語感覚を養う
小学校 中学年	<ul style="list-style-type: none"> 言葉には、性の多様性について考えたことや思ったことを表す働きがあることに気づく 性の多様性に関する語彙を豊かにする 読書が、性の多様性をめぐる必要な知識や情報を得ることに役立つことに気づく 	<ul style="list-style-type: none"> 性の多様性をめぐることがらに対して、感想や自分の考えをもつ 性の多様性をめぐることがらに対して感じたことや考えたことを共有し、一人ひとりの感じ方などに違いがあることに気づく 	<ul style="list-style-type: none"> 性をめぐる多様な見方・考え方に基づく言葉がもつよさに気づく 性の多様性に関する言語感覚を養う
小学校 高学年	<ul style="list-style-type: none"> 言葉には、性の多様性をめぐる相手とのつながりをつくる働きがあることに気づく 語感や言葉の使い方に対する感覚を意識して、性の多様性に関する語彙を豊かにする 時代の経過や、性をめぐる価値観の変化による言葉の変化に気づく 読書が、性の多様性をめぐる自分の考えを広げることに役立つことに気づく 	<ul style="list-style-type: none"> 性の多様性をめぐることがらに対して、自分の考えを広げたりまとめたりする 性の多様性をめぐることがらに対してまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げる 	<ul style="list-style-type: none"> 性をめぐる多様な見方・考え方に基づく言葉がもつよさを認識する 性の多様性に関する言語感覚を養う

<引用文献>

- いのちリスペクト。ホワイトトリボン・キャンペーン、平成25年度東京都地域自殺対策緊急強化補助事業「LGBTの学校生活に関する実態調査（2013）結果報告書」2014年
- 中塚幹也『封じ込められた子ども、その心を聴く—性同一性障害の生徒に向き合う』ふくろう出版、2018年

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 永田 麻詠	4. 巻 88
2. 論文標題 国語科教育における多様な性への対応と言語感覚の育成 国語科教育	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国語科教育	6. 最初と最後の頁 39-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20555/kokugoka.88.0_39	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 永田 麻詠	4. 巻 48
2. 論文標題 性の多様性をめぐる授業実践の課題と方法	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育方法48 中等教育の課題に教育方法学はどう取り組むか	6. 最初と最後の頁 95-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 永田 麻詠	4. 巻 1
2. 論文標題 多様な性を生きる子どもの姿から国語科教育を問いなおす 日本語基礎事項の学習を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国語科教育を問いなおす	6. 最初と最後の頁 25-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 永田 麻詠	4. 巻 19
2. 論文標題 性の多様性を包摂する国語教育と批判的リテラシーの検討 クィア・ペダゴジーを手がかりに	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 関係性の教育学	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 川俣沙織 , 渡邊望 , 森木朋佳 , 島田知和 , 中山智哉 , 永田麻詠 , 大元千種 , 岡本満江 , 山本直樹 , 下川涼子 , 大谷朝 , 高橋さおり	4. 発行年 2021年
2. 出版社 同文書院	5. 総ページ数 234
3. 書名 保育内容「言葉」話し、考え、つながる言葉の力を育てる	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------